

メッセージアウトライン テサロニケ人への手紙 第一4:13~18 「空中で主と会う」

[13]「眠った人々のことについては、兄弟たち、あなたがたに知らないでいてもらいたくありません。あなたがたが他の望みのない人々のように悲しみに沈むことのないためです」

テサロニケ教会にはパウロの語った福音のことばを誤解して、自分たちが生きている間にキリストが地上に再び来られると確信していた人々がいた。しかし、彼らの中で死ぬ者も出てきて、しかもキリストがまだ来られないので、はたして死んだ者はどうなったのか。彼らは永遠の天の御国へ入れるのかと不安と動揺が生じていたようである。そこでパウロは彼らに「…あなたがたに知らないでいてもらいたくありません」とイエス・キリストの再臨と死者の復活について正しい知識を与え、慰め、希望を持たせようとして語る。

「眠った人々」…死んだ人々のこと。→マタイ27:52、ヨハネ11:11~12

「他の望みのない人々」…イエス・キリストの復活の事実に基づく死後の希望を持たない人々。すなわち神を知らない異邦人、未信者→エペソ2:3、12

[14]「私たちはイエスが死んで復活されたことを信じています。それならば、神はまたそのように、イエスにあって眠った人々をイエスといっしょに連れて来られるはずですよ」

クリスチャンの望みはイエス・キリストが死んで復活された事実に確実な基盤を持つ。イエス・キリストを信じて死んでいったクリスチャンはイエスと同様に死より復活する。→ローマ6:4~5 このことを確実に知り、信じることは不安の中にあるテサロニケ人にとって大きな慰めであり、希望となる。信仰を持って死んでいった人々はイエスとともに再び来るのである。

[15]「私たちは主のみことばのとおりに言いますが、主が再び来られるときまで生き残っている私たちが、死んでいる人々に優先するようなことは決してありません」

ここで言う「主のみことば」とはパウロが直接的啓示によって主から聞いたことか、または教会に主のことばとして伝えられている言い伝えのことと思われる。しかし、パウロ自身は主が再び来られないうちに死んで、生き残れなかったのだから、彼は間違ったことを言ったのだと考える者がいるかもしれない。しかし彼は、ある特定の年月日にイエス・キリストが再び来られるということは言うてはいない。マタイ24:36節でも「その日、その時がいつであるかはだれも知りません。天の御使いたちも子も知りません。ただ父だけが知っておられます」とイエスご自身が言うておられる（もっとも、これはイエスが地上に人となって来られた時の人性の面において、知るべきではないし、知る必要もないとわきまえておられたということである）。

イエスご自身がこのようにわきまえておられるのに、パウロがその日を知っていると断言できるはずはない。ただ、彼はそれだけ主が再び来られるのが近いと身近

に感じていたのでこのような表現をしたのであろう。パウロを始め、歴代のキリスト者はそのように思って常に心の準備をしていたのである。

そして、この15節で重要なことは、主がいつ来られるか、その時、地上でだれが生き残っているかということよりも、主が再び来られる時に地上に生き残っているクリスチャンは、すでに死んでいったクリスチャンたちに先がけることはないという点である。

[16-17]「主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることとなります」

「ラッパ」→マタイ24:31、Iコリント15:52 祭りや戦いの勝利の時にはラッパが吹かれた。

「たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会う」…キリスト再臨の時にすでに死んでいたクリスチャンたちと、地上に生き残っていたクリスチャンたちが一挙に空中に引き上げられ、主と会う。これを「携挙」という。その時、クリスチャンたちのからだも朽ちないものに変えられる。→Iコリント15:35-54

[18]「こういうわけですから、このことばをもって互いに慰め合いなさい」

イエス・キリストの再臨の時に死より復活することこそクリスチャンの希望であり、慰めである。やがて主が再び来られる時には、それぞれの生き方に従って正しい報いを与えてくださる。その日を望んで私たちは主がいつ来られてもよいように日々の生活を整えて、神のみこころにかなった信仰生活を送ることが大切である。